



# 心に浮かぶ詩情を紙に描く

## 片岡鶴太郎

紙に対しての新しい発見と深い驚きを感じようになったのは、40歳になって絵を描くようになってからだ。日本画に使われる紙にはこんなに種類があるのかと目を丸くし、紙の違いによって表現の仕方もこんなに変わるんだということを知った。

その一例が麻紙である。描き始めた頃は、画仙紙などのなじみやすい紙を使っていたのだが、日本画の先生のアトリエに伺った時に画仙紙よりはなじみにくい麻紙の存在を知り、その麻紙に「響水引き」というなじみ止めをかけるという方法を教えていただいた。響水引きというのは膠とミョウバンを混ぜた液を紙全体に塗っていくものだが、それを乾かす

にじみ止めとなる。普通の紙に墨をたらすとスッとにじんでいくが、それに響水引きをかけるとにじみが遅れるため、表面張力で墨がブーツとぶくぶく感しになる。この状態が1分くらい続いてだんだんと染み込んでいくので、「この瞬間を利用して」「たらしこみ」という技法を使うことができるわけだ。

たらしこみを初めて見た時は、こんな描き方があったのかと本当に驚いた。たとえば、虹鱗を描く場合なら、薄墨、中ぐらいの薄墨、濃いめの墨と3段階のものを用意しておき、初めに薄墨で虹鱗の体を描き、次に中ぐらいの薄墨で背の部分を重ねていき、最後に背中の斑点を濃いめの墨で乗せていく。そうすると、濃さの違う3種類の墨の境界線が微妙に重なり合い、にじみあって、独特の表現が生まれるのである。私もこのなんともいえない味わいが大好きなのだが、尾形光琳に代表される江戸時代の琳派の絵師たちの仕事にはこのたらしこみの技法が効果的に使われていることを知り、合点がいった。

絵を描きたいと思うようになったのは40歳を目前に控えていた頃だ。20代で笑い、30代で役者とボクシングにのめりこんできたこれまでの人生に悔いはな



片岡鶴太郎(かたおか・つるたろう) 1954年、東京都生まれ。幼少より役者を夢見る。都立竹台高校卒業後、声帯模写の片岡鶴八に弟子入り。オレたちひょうきん族」などで人気を博す。その後、俳優に転身し、映画、テレビで好演。1994年より絵画に精進し、独自の世界を築く。

かったが、30代前半からずっと関わり続けてきたドラマシリーズも終了し、セコンドとして応援していたボクシングの世界チャンピオン・鬼塚勝也選手も引退して、どうにもならない虚無感を抱えていた時期があった。そんな時に、ふと見上げた月の風情や名もない花に停まっている蜻蛉の姿など、自然の風景や小さな命に強く惹かれたのだ。胸がキューンとするような、そんな心のありよつを表現したい……。しかし、お笑いや演技ではそれも叶わない。絵しかないことを確信したのはこの頃だ。

先日、男鹿半島で採れた桜鯛を送ってもらった。50cmはあるかというその桜鯛を見たときに心底しびれてしまった。なぜ自分はこれを描きたいのか……。モチーフと対峙していると心の中に詩情が湧き上がってくる。これから先、どんな絵が描けるのかは見当もつかないが、無限の可能性をもつ紙がある限り、私は精魂込めて描き続けていくに違いない。

### PAPER Q&A Vol.6

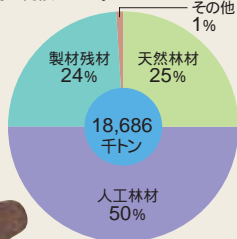
#### Q. 紙は、どのような木材が使われているのですか？

#### A. 間伐材や端材、建築廃材など様々なものを利用しています。

製紙技術が進み、紙は木材を細かくしたチップから作られるようになりました。そのため、製材残材、間伐材などを原料としてフル活用しています。製材に適さない細い木や曲がった木、そして丸太から製材を切り出した後の半端な木です(下図参照)。グラフのように人工林材や製材残材が原料の大部分になっています。製紙産業は、ムダなく木材を有効利用しています。

紙の原料になる木材の構成比 (2003年)

紙の原料は、古紙60%、木材40%です。木材の内訳は……。



紙の原料になる部分



建築用製材になる部分

(日本製紙連合会調べ)



次回は11月4日号、光浦靖子さんです。

提供 日本製紙連合会 <http://www.jpa.gr.jp>

photo : Yohei Maruyama